

熊取とうろう祭りにせまる

—今は無きとうろう祭りはどのようなものだったか—

I 研究動機と研究目的

小学生の時、班の調べ学習でとうろう祭りについて調べた。しかし、今はもう無い。どのような経緯で始まり、終わってしまったのか。

もっと詳しく知り、自分の故郷「熊取」について考えていきたい。

II 研究方法

- ①文献でとうろう祭りを大まかに調べる。
- ②現地調査や資料での調査を行う。
- ③他の意見と自分の意見を比較する。
- ④結果・考察・まとめを行う。

III 研究内容

1. 概要

暦の6月10日・11日は「灯籠（燈籠）祭り」と呼ばれ、祭りの起源については地車同様確かな記録はないが、中家がゆかりの深かった後白河上皇の霊を大森神社に招き、慰霊の行事に御輿（みこし）を担いだのが遠因とされている。灯籠祭りの語源は、大森神社の夏の出し物が灯籠であったためこう呼ばれていたといわれる。（夏祭りは御輿が中心で檀尻（地車）は従的役割だったといわれている。）

最初は中家が選んだ54家の人達が、交替で担ぎ、紺屋山から湊（泉佐野市湊）を経て、泉佐野の浜へ渡御されたとの記録もあるが、長い年月のうちには中家が選んだ五十四名家に盛衰があり、この制度も崩れ、各字が年番制で担ぐようになったといわれている。しかし、御輿は順番を無視して絶え入った警官と衝突し、負傷者も出たので協議の結果御輿を担ぐことが禁止となり、御輿庫へ納められたまま今日に至っている。御輿が取りやめになってからは、それに変わるものとして各字ごとに灯籠に担ぎだされるようになり、祭礼日も新暦の7月11日・12日に行われるようになった。灯籠の整備は、1年の汚れを洗い流し、補修箇所があれば地元の大工に修理を依頼したりし清掃なった灯籠を、丸太棒に組み合わせ、縄での各枠に和紙を貼りそして正面に貼った和紙に大森神社、また後ろの枠の和紙には御神燈と墨あと鮮やかに大書し、赤インク・青インクで霧をふきつけ、化粧をほどこした墨、顔料で五穀豊穡の字を書く。



↑復活された子供とうろう祭り。
今は行われていない。

2. 後白河上皇との関係

①後白河上皇とは？

後白河上皇（1127～1192）は鳥羽天皇の皇子。保元・平治の乱を始め、武家の力を利用して朝廷での地歩を固め、武家政権との共存を目指した。1158年、守仁天皇（二条天皇）に譲位し、5代34年にわたり院政をしくことになる。その後、平氏との関係は悪化し、平氏追討の令を出した。また、頼朝の要求で義経追討の令を出す。



後白河上皇（1127～1192）→

②院の熊野詣

平安末期、社会不安が広がり、浄土信仰が流行し、人々は心を傾けていく。

後白河上皇も浄土信仰に心を傾けた一人だった。秘境熊野も霊地の一つだ。後白河上皇が熊野詣の際、熊取に立ち寄る。そこで五門（熊取の地区）の中家を行宮（仮設の御所）とした伝承がある。中家が選んだ54人の人々は、上皇の輿を担いだ。

理由としては、熊野街道に近いこと。王子の一つが佐野にまつられていたということだ。

中家を行宮としていた時の門は、唐門と呼ばれる。

3. とうろう祭りに関する建造物

①中家とは？

泉南地域の由緒ある旧家。昭和39（1964）年に国の重要文化財に指定された。現在、一般公開されており、かつての隆盛をしのぶことができる。



↑中家と唐門

②大森神社とは？

熊取町の大宮区にある神社。祭神は、菅原道真公。創建の年月は、よく分かっていない。大字野田川向かいの野田神社、同大字成合の雨山神社と共に熊取の三社と呼ばれ、三社に降雨の祈願を行った。明治時代、熊取の各社が大森神社に統合された。



↑大森神社の本殿

4. 熊取町と町民の民俗的気質

①熊取町とは？

熊取町は、大阪府泉南地域に位置する町。町としては大阪府下で最も人口が多い。主な産業は、タオル。泉州たまねぎ、水なすが有名。

②熊取町の村の区分

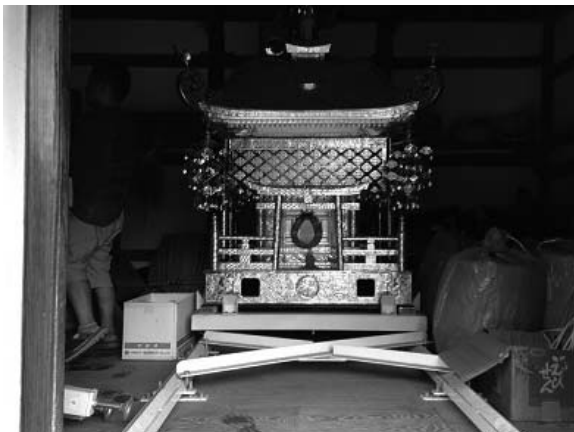
昔、熊取には、「熊取八カ村」といわれる区分があった。現在も地区として残っている。熊取は、地域が独立していて、地域ごとの派ばつも大きかったという。

- ・久保、野田、小谷等…中内（大宮も含む。）
- ・大久保、五門、紺屋、七山、小垣内

特に大宮、五門の仲が悪かった。とうろう祭りのけんかが、だんじり祭りへと続いたといわれている。それぞれの村の意見の食い違いが大きかったといわれている。

5. 五十四名家と御輿

中家が選んだ54の由緒ある家の人々が、7月12日の夏祭りの日に御輿を担いだ。泉佐野の十三湊まで54人の人々が御輿を担ぎ、湊で御輿を清めた。途中、紺屋山と平松の御族所で休みながら湊へ向かう。御輿は大正時代に中止された。中止の理由としては中家が湊までの土地を持っていたので御旅所が建てられたと考えられていて、中家の権力が弱まっていったことで無くなったと思う。



←大森神社の蔵に納められている御輿。全てが金箔でぬられている。日本で約2番目に大きいらしい。

6. 庶民ととうろう祭り

7月12日、御輿の渡御が行われると共に村民が自分達の村をまわるとうろう祭りが行われていた。

六角型または八角型のとうろうを丸太棒で組み合わせて、御輿型にする。豊作を願う。昔は農業等が無かったため、青い外灯で虫をおびき寄せ、田につかないようにした。つまり、豊作の象徴である「明かり」をとうろうで表すのだ。これは、虫をおびき寄せることで「虫送り」と呼ばれる。



←大森神社の蔵にあるとうろう。
これはライオンズクラブによって
復活した時のもの。

①昔と今の害虫対策

古代から中世にかけては、農薬のようなものは無かったので、儀式を行い、「豊作」や「害虫退散」を祈るか、人手で害虫を取り除くしかなかった。

その後、江戸時代になると油や水、虫取り器が使われるようになった。また天然の農薬が使われるようになった。

明治時代以降、科学的に農薬が開発され、使われるようになった。現在は環境への配慮もされるようになった。

7. 熊取の祭り

だんじり祭り（御例祭地車宮入神賑い）

岸和田のだんじり祭りは有名だが、大阪府南部（堺から泉州にかけて）で盛んな祭り。熊取では、毎年10月の第2月曜日の前々日と前日に行われる。1日目は、大森神社での宮入りが行われる。各区の地車が宮入、境内中央の舞台を3度回り、11台がそろって各区に帰っていく。2日目は、熊取駅前パレードが行われる。

8. 人々のとうろう祭りへの思い

母に協力してもらい、おじいさん、おばあさんにとうろう祭りについてインタビューした。すると、男性と女性の意見が2つに分かれた。

- 男性…けんか祭り。夜になると大人が木刀を持ってけんかをしていたこともあるという。それが次のだんじり祭りへのけんかにつながった。
- 女性…子供祭り。子供達がとうろうを担いだという。お菓子をもらったりして、子供達のたのしみであったという。

9. とうろう祭りの復活

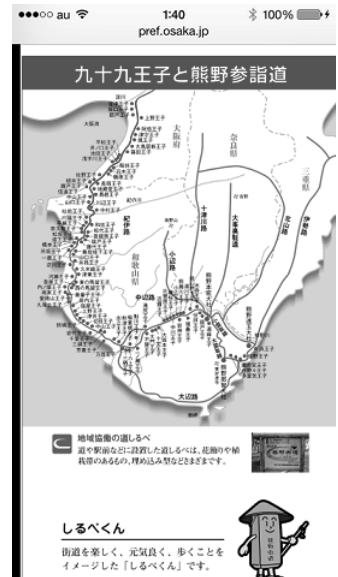
昭和60年(1985)に各地区の子供達の楽しい夏祭りとしてライオンズクラブによって復活した。

町内の中央小学校で子供達がとうろうを担ぎ、小学校内を回った。しかし、祭りとしてではなく、イベントとしての復活だったので4、5年で終わってしまった。

復活の資金は、「一億円のふるさと蘇生資金」のものだ。

10. 大阪から始まる熊野詣

紀伊半島の山々に囲まれた聖地、熊野を目指し、人々が歩いた道が「熊野街道」となった。熊野詣は、平安時代の上皇や法皇から始まり、時代と共に武士から庶民へと広がり、「蟻の熊野詣」と呼ばれるまで盛んになった。渡辺の津(現在の天満橋周辺)から始まり、熊野へと向かう。



○佐野の一人の王子の真相

「佐野王子」がその王子の一つだった。理由としては、とうろう祭りで御輿を担いだのが湊までとされている。私はその湊を繁栄された佐野王子に後白河上皇は敬意があったと思う。

IV 考察

終わってしまった理由は、ケンカが主とされていたが私は違う意見だ。主な理由として二つある。

一つ目は、急速な都市化、また移住者が増えたことで地元への意識がうすれていったことだ。特に新興住宅街ができたことに大きな意味があると思う。田舎町に静かな暮らしを求めてやってきた人は、さぞかし祭りにはあまり興味がないのだろう。つまり、とうろう祭りへの「祭り離れ」も広がっていったのだろう。

二つ目は、ゲームやテレビ、娯楽施設等の新たな楽しみが増えていったのだと考えられる。とうろう祭りは人々の唯一の楽しみではなくなっていったのだろう。

また、復活したことは、熊取の人々は古いものを重んじる傾向があると考えられる。これは、いまだに残る熊取町民の特質として地元の地区意識が高いことに代表される。

したがって、とうろう祭りは、熊取町民の民族特質と時代の変遷をよく表している祭りだといえる。

V 感想と反省

とうろう祭りを研究して思ったことは時代の流れの恐ろしさだ。時代というものは、その時その時で全く違う表情を見せる。

反省点としては、文献調査に頼りすぎたことだ。もっとインタビューや現地調査を行うべきだったと思う。

最後に、ご協力いただいた方、本当にありがとうございました。